
早く気づけばいいのに

桐

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

早く気づけばいいのに

【コード】

N3218C

【作者名】

櫛

【あらすじ】

男は見知らぬ場所に立っていた。目の前には扉が一つ。帰りたいたが、ここがどこだかわからない男は、扉の向こうにいる人物に相談すること……

早く気づけばいいのに

男は扉の前に立っていた。扉といってもそれ程重厚なものではなく、どこにでもある普通の、印象には残らないような扉である。

男は十数分も前からその扉を眺めていた。というのも、男にはこのような場所にまったく見覚えがないのだ。さらに言うならば、どのようにしてここまで来たのかも男にはわからなかった。

左右を見れば突き当りが見えないほどに廊下が続いている。

こんな場所から早く離れてしまおうと思ひ立ち、歩き出そうとするが、そうすると男の頭の隅にちらちらと扉が映り、気になって離れられずにいたのだった。

そのようにうろろろしていると、男は扉に小さな掛け看板が付いていることに今更ながら気がついた。看板は、かろうじて《*** 人生相談室》と読めた。彼には相談するようなことなどまったくなかったが、人は居るだろうと期待し、扉を二、三叩いてみる。すると、

「はい。開いてますよ」

と、少々間の抜けた声が男へと返ってきた。男は人が居ることに安心し、扉を押し開け、部屋の中へと入っていった。

中はそれほど広くはなく、大きな机が一つ置いてあり、パイプ椅子が数脚、雑然と放置されている。

その向こう側には男よりかなり若く見える、ラフな格好をした、耳の形が少し妙な女性が笑顔で座っていた。

「はじめまして。*** 人生相談室へようこそ」

そう言っただけで彼女は男を椅子に座るよう勧めた。男は素直にそれに従い、彼女と机を挟んで向かい合う。

「あの、ここはどこなんですか？」

男は自分が妙なことを言っているとわかりながらも、知らなければ

ばいけないため質問した。しかし、彼女はそれをまるで聞いてない風に無視して話を進める。

「あなたは悩みがあるようですね。なんせ***してしまつたのですから」

男は無視されたことに腹を立てたが、ここで怒鳴っても仕方がない。それに、彼女の言葉が何か引つ掛かった。はつきりと聞こえたはずなのにまったく理解できない言葉があつたからだ。

男が怪訝そうな顔をしているのに気がついた女性は少し慌て、焦りながらまくしたてる。

「あ、すみません。わかりませんよね。まだ慣れてなくて。あたしはアスモと言います。あなたは徳山さんでよろしいですよね？」

男は驚いて素っ頓狂な声を上げた。無理もない。初対面で自分の名を当てられてしまつたのだから。

「な、なぜ、私の名前を知っているのですか？」

アスモと名乗つた女性は自分が失敗したことを知ってか知らずか、またも徳山の質問を無視した。

「あなたの悩みを教えてくださいただけませんか？」

徳山は今ここに居ることが悩みだと言つてしまいたかつたが、さすがにそれはないと思ひ自分の悩みを探してみた。

そして、この間仕事に失敗してしまつたことをなんとか思い出し、ぼつぼつと悩みと言えるかどうかかわからないものを吐き出していった。

「なるほど。それは大変でしたねえ」

アスモは徳山の悩みを聞き終えると、彼の悩みなどどうでも良さそうなお調子でそんなことを言った。徳山はその小馬鹿にするような態度に、さすがに怒りがこみ上げて来るのを感じていたが、その後のアスモの言葉によつて、その怒りなど簡単に忘却してしまつような尋常でない違和感を覚える。

「それで屋上に行つたんですね？」

なぜ彼女が知っているのかという以前に、どうして屋上へ行っただけなのかはわからなかった。わからなかったが確かに徳山には最近、屋上へ行った記憶があった。

「ええ、仕事で失敗しましたから。頭を冷やしに行っただですよ」
「そうであるはずだと彼は自分を納得させながら告げた。

「屋上では何をやっただんですか？」

また、どきり、と心臓が飛び出すように高鳴った。徳山の背筋は冷や汗で冷たく湿ってしまっている。自分が何をしたのかは思い出せないが、それは思い出したくもないことだというのはなんとなくわかっていった。思い出そうとしただけで、ぞくり、と悪寒が走るのだ。

アスモはそんな彼をずっと見つめている。その表情は時には楽しそうに、時には残念そうに歪められていた。

それからしばらく、他愛のない話をして、

「あなたはもう何にも縛られない自由を手に入れているとしたらどうしますか？」

アスモは徳山にそんなことを聞いた。ばかばかしいと思った徳山だが、彼女の極めてまじめで真剣な様子に驚き、仕方なくそれに応えるため、自分なりの考えを適当にまとめた。

「私には自由なんてありませんよ。会社に縛られ、家族に縛られ、社会に縛られていますから。自由を手に行っているなんてありえませんが、」

その答えに不服そうに眉を寄せていたアスモだったが、それも少しの間で、すぐに先刻までの笑顔に戻っていた。

「すみません。そろそろ帰り道を教えていただけませんか？」

徳山はまた無視されることを覚悟しながら切り出した。しかし、「会社まででよろしければ」と、今度は素直に教えてくれた。彼は数度アスモに礼を言い、そそくさと立ち上がって扉へと歩いていっ

た。そして、躊躇いなく扉を開けて、足を踏み出し、部屋から完全に体が出た瞬間、煙のように、いや、実際煙となって

徳山はこの空間から消失してしまった。

「あゝあ、結局思い出せなかったかあ。自縛霊確定だな」

言葉自体は残念そうだが、声音はひどく楽しそうなアスモのつぶやきは、すでに消えてしまっている徳山に届くことはなかった。

ボタン、と閉じられた扉には《死後の人生相談室》と書かれた掛け看板が静かに、ゆっくりと揺れていた。

(後書き)

目を通していただいております。

死ぬことは怖いですが、死んでからの方が怖いですよ。生きてるうちには死後の世界を想像することしかできませんから。

早く気づけばいいのに

早く気づけばいいのに

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3218c/>

早く気づけばいいのに

2009年3月25日13時07分発行